

# 大学内外に存在する日本語教育に 関わるリソースの更なる活用可能性

— 日本語をリンクに留学生・大学生・  
地域を結びつける —

近藤優美子・坂口 昌子・中西久実子

## 1. はじめに

京都外国語大学には、2008年度「質の高い大学教育推進プログラム教育GP」に採択（「多文化共生時代の協働による日本語教員養成一体験活動での教育効果を高める WEB ダイアリの活用」）された活動の一環として設置された、日本語教員養成推進室（以下「推進室」）が存在する。

推進室には日本語教育学、日本語学の専門書や、日本語教科書、参考書、教材教具が揃えられており、5台設置されているパソコンやコピー機を使って日本語教育実習などの準備をすることができる。設置当初は学生のティーチングアシスタント（以下「TA」）が交替で勤務していたが、2009年度からは日本語教育を専門とする研究員が常駐し、TAと連携して利用者の対応を行うようになった（大谷・中俣・中西 2013、北川・中西 2015）。

2008年の設立以来、歴代の3人の研究員により、「日本語学科生が利用する」（2008～2010年度）、「外国人留学生が利用する」（2011～2012年度）、「大学院生が利用する」（2013～2015年度）と目標が設定され、推進室の利用者は拡大してきた。研究員と日本語学科教員の尽力により、推進室は「日本語教員養成」のリソースとして多くの学生に活用され、学生の在学中の学びの充実、就職などにも貢献してきた。筆者、近藤は4人目の研究員として2016年度に着任したが、推進室が大学全体・そして地域にとってもより強力なリソースとなりうる

可能性を未だ秘めているのではないかと考え、着任時から推進室の活動の細かな変更を実施した。本稿では、推進室で行われている活動にどのような変更がなされ、その変更がその後どのような効果を生み出したかについて報告する。

## 2. 推進室の利用者の再設定

本節では、2016～2017年度の推進室の活動の指針について説明する。

「日本語教員養成推進室」という名称からも、推進室は日本語教員志望の学生が主な利用者とされていた。しかし、推進室には日本語をリンクとして点にするニーズを結びつけ、互いをリソースと変える更なる可能性があると思われた。それらは大きく横の広がりと縦のつながりという2つのグループに分けられる。

まず、横の広がりだが、京都外国語大学には100名を越える別科生が在籍し、また京都には多くの日本語学校があり、そこでは多くの留学生が日本語を学んでいる。この日本語を学ぼうとする留学生たちは、日本に住んでいるもの日本人と日本語で交流する機会は少なく、日本語の上達のために日本人との交流を希望している場合が多い。一方で、このような留学生は京都外国語大学で日本語教育を志す学生にとっては教育実践のための貴重なリソースとなる。また、外国語学部で外国語を学ぶ日本人学生には留学や、海外に居住することを希望する者が多いが、このような学生たちも留学生と交流することで国際感覚を身につけることを希望している。

これらの、日本語をリンクとして結びつけるニーズの主体をまとめると、次の3つのグループに分けられる。

- ① 日本語を学ぼうとする人
- ② 国際交流を希望する学生
- ③ 日本語教育を志す学生

これらのグループが推進室によって結びつけられれば、互いのグループのニーズがかみ合い、互いにとって貴重なリソースとなりうる。そして、推進室がそれらを結びつける中心となることで、推進室は日本語学科の学生にとってだけ

ではなく、大学全体・地域にとって強力なリソースとなりうると考えた。

次に縦のつながりだが、これは2つに分けられる。

1つは日本語教育に関心を持って推進室を利用する学生から、かつて利用していた卒業生までの「人のつながり」である。授業の履修からゼミ選択、教壇実習、留学、進学、就職など全ての場面において下級生にとって上級生は情報の宝庫である。だが、下級生からそれらの相談を受けていると、上級生とのパイプが十分に作られておらず、上級生から情報を受けとることができていないことが伺われた。下級生は迷惑をかけることへの、上級生は下級生の輪に介入していくことへの、互いの遠慮が相互の交流を妨げているようであった。これは知識の伝達という点で非常に非効率적であり、双方の成長の機会を奪うものである。この縦のつながりを築くことができれば、推進室は学部1年次生から4年次生、大学院生、日本語学校で働く卒業生という日本語教育に係る多様な立場の人間が相互に必要な情報をやり取りする強力なリソースになりうると考えた。

もう1つの縦のつながりは過去から現在への「情報のつながり」である。推進室は担当の研究員が2～3年周期という短期間で入れ替わるため、これまでの推進室の活動で得られた情報が分散しており、容易にアクセス可能な状態では蓄積されていなかった。これらの過去の活動に関する情報を一元化し、容易にアクセスできるように整理にすることも、過去の推進室での活動をリソースと変える点で、縦のつながりの構築の一つといえる。

### 3. ニーズを結びつける手段

前節では、横の広がりとは縦のつながりの構築という2016～2017年度の推進室の活動の指針を示した。本節ではその構築のための手段を示す。

大学内外に点在するニーズをリソースに変えるには、まず互いを結びつける必要がある。そこでその方法だが、横の広がりをつなげるためには、まずは広範囲に情報を拡散することが必要であり、縦のつながりをつなげるには、研究員が仲立ちとなって学生同士が直接対面できる機会を用意することが効果

的であると考えた。

まず、横の広がりのための情報の拡散であるが、2015年度までは推進室からの告知には主に JapaS<sup>i</sup> を利用していた（由井・中西・中俣 2010、中西・村上・上田 2011）。この JapaS は情報の蓄積や学習の振り返りには非常に効果的だが（山本 2006、中西 2008、2011）、ログインが必要である点でアクセスする学生が少なく、またログインできる ID を所有しているのは日本語学科の学生と日本語教員養成プログラムに副専攻で登録している学生に限られる。そこで、JapaS は情報の蓄積に利用しつつ、情報の拡散には新たなツールを利用することにした。

1 つ目は既に存在していた日本語学科 Facebook ページである。学生の閲覧を促すよう更新頻度を上げ、様々な学生が関心を持つよう記事の内容を多様化した。具体的には、京都で行われる国際交流イベント、国際交流のボランティア活動の告知、日本語教育に関係する情報提供、日本語を研究する際に役立つ情報の提供など、現役の日本語教師・大学院生から学部 1 年次生までをターゲットとした。

2 つ目は日本語学科 twitter の開設である。Facebook よりもフォロワーが付きやすい傾向を利用して、Facebook 記事の更新を twitter で知らせ、Facebook に閲覧者を導くようにした。Facebook、twitter とともに学内だけでなく、学外の日本語教育関係者の閲覧も多く、当初想定していたよりもより広い範囲に有用な情報を配信することが可能になった。また、京都外国語大学の学生の取り組みも頻繁に紹介しているため、進学を考える高校生や日本語学校採用担当者に対する広報としても機能するという副産物も得られた。

3 つ目は、日本語ボランティア情報を提供する推進室メーリングリストの作成である。学生への聞き取り調査から学生たちが対面・メールでの問い合わせを苦手とすることがわかったため、Google Forms を利用してインターネット上で推進室メーリングリストに登録できるシステムを作成した。

4 つ目は、以上のネットを利用した広報活動とは正反対の対面の広報活動である。研究員自身が担当している授業や、日本語学科専任教員の授業、日本語

学科のイベントなどに研究員が出席し直接推進室での活動や推進室メーリングリストを紹介することで、「知らない人がいる知らない部屋に行く」という障壁を下げることを試みた。

その結果、現在ボランティア情報を提供する推進室メーリングリストには短大生や大学院生を含む全学科の学生が約300人登録している。その半数は英米語学科の学生が占め、日本語学科の学生にとどまらず、全学の学生に国際交流情報を提供することが可能になった。

次に縦のつながりであるが、これは卒業生を含む場合と在学生のみである場合でとる手法が大きく異なる。

まず日本語学校に勤務する卒業生と在学生が就職情報を共有する場として、Facebook に就職情報を紹介する非公開グループを作成した。ここでは大学教員が受け取った就職情報を掲載すると共に、日本語学校で働いている卒業生が就職情報を掲載しており、在学生の就職機会の拡充に役立っている。

次に学内の学生間については先述の通り研究員が仲立ちとなって学生個人が直接対面できる機会を様々な活動ごとに用意した。その活動については5節で詳細を述べる。

研究員が仲立ちとなって情報提供を求める下級生に上級生を紹介する場合、最も大切な基盤は研究員と各学生との信頼関係である。それがなければ、見知らぬ後輩に時間を割き、自己の経験した情報を提供することが快諾されることは難しく、やらされるものであれば学生同士の関係も希薄なものにとどまる。学生との信頼関係の構築のためには、研究員が日々学生の細かな悩みを聞き、それに真摯に対応することが必要になる。それはたとえばメールやレポートの形式、履修・ゼミ選択、アルバイト・進路・就職、研究計画など学生の大学生生活の全てに及ぶ悩みである。ある学生が「推進室は保健室みたい」と漏らしたことがあるが、一見日本語教育とは無関係な学生の様々な悩みに対応することが、研究員への信頼を育て、推進室を中心とした縦のつながりの構築の基盤となるのである。

## 4. 横の広がりを結びつける：相互リソースとしての活動

前節では大学内外に存在する多様なニーズを結びつけるために用いた手法を示した。本節では、それらによりどのように横の広がりが構築され、ニーズがリソースに変化したかを述べる。具体的にはどのような活動が推進室で行われているかについて、日本語を学ぼうとする人を中心に据えて述べていく。

推進室が行う活動に関係する日本語を学ぼうとする人は大きく次の3つに分かれる。

- ① 留学生別科の学生・学部留学生
- ② 非日本語母語話者である外国語学科講師
- ③ 近隣の学校で日本語を学ぶ留学生

ここから、それぞれの学習者のニーズによりどのような組み合わせでどのような活動が行われているかと、その効果について述べる。

### 4. 1 留学生別科の日本語会話練習を求める学習者×

#### 国際交流を求める日本人学生

日本語レベルが中級以上になった日本語学習者は、日本語教育経験のない日本人とも日本語での交流が十分に可能である。むしろコントロールされていない自然な日本語を歓迎する向きもある。このような学習者と国際交流を求める日本人学生はお互いに魅力的なリソースとなる。そこで、2016年度から推進室で週に1回1時間、日本語会話練習ができる活動を始めることにした。研究員のサポートは希望者の授業の空き時間を調査し、その時間が合う学生同士をマッチングして紹介すること、相手のレベルに合わせた日本語での会話の続け方のコツを日本人学生に簡単に説明することである。この活動は双方の学生に大変に好評であった。留学生の参加者は当初研究員の担当クラスの学生が中心だったが、その後留学生間の口コミで希望者が増え、日本人学生側、特に日本語学科以外の学生からは外国語学科でも日本語ではなく学習言語を対象にした同様の活動はないのかという問い合わせが多数寄せられた。2017年度春学期だけで、

23組のペアが活動を行い、秋学期も多くのペアが活動している。

#### 4. 2 留学生別科の授業履修者×国際交流を求める日本人学生

留学生別科の授業では、正規・短期の授業活動の一環として度々授業に参加する日本人ゲストを募集しているが、このゲストがなかなか集まらないことが別科教員の悩みの一つであった。これはニーズが孤立している状態であったといえる。しかし、日本語ボランティア情報を提供する推進室メーリングリスト作成後は国際交流を希望する多くの学生に活動を周知することが可能になり、お互いのニーズを結びつけることが可能になった。その結果、別科の教員からは授業に参加するゲストが格段に集まりやすくなったとのコメントを受けている。また、日本語学科以外の学生からもこれまで知らなかった国際交流のチャンスを知ることができるようになったと歓迎されており、この授業参加をきっかけに推進室を訪れるようになるなど、推進室での活動に参加する入り口の1つになっている。

#### 4. 3 留学生別科・学部の日本語サポート求める学習者×

##### 日本語教育を志す学生

近年、留学生別科の人数が増えることでクラス内の人数が増え、授業についていくことが困難な学生が出るようになってきている。そのような背景から、別科教員の依頼を受けて、授業の復習を日本語教員志望の学生が担当する補習レッスンをコーディネートしている。1対1のフォローにより別科生は日本語でのコミュニケーションに次第に自信を持てるようになり、また日本語教師志望の学生には復習という入りやすい形から教授経験を積むことができる機会となっている。これもまた互いのニーズを結びつけた形の1つである。

また、学部には多くの留学生がおり、卒業論文や就職活動のための書類作成でネイティブチェックを希望する学生がいる。そのような学生にもチューターとなりうるボランティアの学生を紹介している。

これらの活動は推進室で行われていることから、担当日本人学生では説明し

きれない事項はすぐに研究員がサポートすることができる。そのため、「教える」ことに躊躇する学生の最初の一步を後押しすることができる。また、一度結びつけたニーズがリソースとなる前に「思っていたものと違う」「大変すぎる」などと離れてしまわぬよう、このようなサポートは欠かすことができない。2017年春学期には7組がこのような活動を行った。

#### 4. 4 非日本語母語話者である外国語学科講師×

##### 日本語講師志望の学生

京都外国語大学には専任講師として長期間日本に滞在している外国人講師と、客員研修員などとして短期間日本に滞在する外国人講師が在籍している。短期滞在の場合は生活におけるサバイバル日本語を、長期間日本に滞在し既に日常的な日本語は習得している場合は上級の日本語の学習を希望する声がある。そこでこのニーズをリソースに変えるため、推進室は以前から日本語講師志望の学生によるプライベートレッスンを設けている。推進室では初回のニーズ調査を行い、各講師のニーズに応じたプログラムを組んでいる。2016年度からは実践の場を得た学生達は JapaS に授業内容と振り返りを記載しており、研究員は毎回その内容を確認し、フィードバックを行っている。JapaS を利用することで学生たちは授業を客観的に振り返ることが可能になり、研究員のコメントも付くためより大きな学びにつながるという声を受けている。また、この記録は5節で述べる知識の縦のつながりにも大きな役割を果たしている。このレッスンは外国人講師の評価も高く、担当学生を変えつつ何年も継続されている。2017年度春学期には、5組が活動を行った。

#### 4. 5 近隣の日本語学校の学生×国際交流を希望する学生

京都の日本語学校では多くの留学生が日本語を学んでおり、また多くの本学の卒業生がそこで勤務している。そこで、日本語で話す機会を望む留学生と国際交流を望む学部生を結びつけるため、卒業生である日本語教師と連携し、次の2種類の活動を行っている。



1つは日本語学校でのイベント・ビジターセッションに本学学生が参加し、直接日本語を使って交流をするというものである。この活動は日本語学校が主導し、推進室では広報活動を行っている。この広報には推進室メーリングリストが大きな役割を果たしており、推進室に来室したことのない日本語学科以外の学生でも、国際交流の機会を得ることが可能になっている。

もう1つは、無料通話アプリを用いた会話交流である。この活動は2016年度から研究員主導で行っているもので、週に1回30分程度アプリのテレビ電話機能を用いて日本語学校にいる学生と日本語で会話をするというものである。これはアルバイトや授業のため毎週直接交流するのは難しいが日本語会話や国際交流をしたいという互いのニーズをリソースに変えるために始めた活動である。推進室では参加学生の募集、日本語学校の学生とのマッチング、交流の際に気をつける点についての説明を行っている。日本語学校の学生には同年代の日本人から日本語だけでなく文化を学ぶことができると好評で、日本人学生からは留学生出身国のイメージが変わった親しみが沸いたなどの反応を得ている。2017年度春学期には20組の学生が参加した。

#### 4. 6 近隣で日本語を必要とする人×日本語教師を志す学生

京都の中・高等学校には日本語の支援を必要とする生徒が多く在籍しており、京都市の要請を受けて日本語支援ボランティアを行う学生を募集している。このニーズをリソースに変えた活動の一つとして、2016年度から西京高校の交換留学生の日本語指導のために日本語教師志望の学生を派遣している。推進室では、学生チームのコーディネーターやカリキュラムの作成を行い、担当学生がJapaSに書き込む引継ぎに毎日コメントしている。これにより毎日のレッスンという一人の学生では担当しきれない授業を、複数の学生によるチームで担当することが可能になっている。

また、本学教員から依頼を受けて学外の日本語を必要とする人へのボランティアレッスンも同様に実施している。

#### 4. 7 海外で日本語を学ぶ学生×国際交流を希望する学生

京都外国語大学では2010年度より海外の協定校で日本語を学ぶ学生と本学の学生がテレビ会議システムを用いて日本語で交流するというプロジェクト TLJ (Talk and learn Japanese、2013年度までの名称は Japai'i) を行っている(中俣・岸・中西・村上 2010)。この活動も海外で日本語を使う機会の少ない日本語学習者と国際交流を希望する日本人学生というニーズを結びつけリソースに変える活動の1つである。

研究員は参加者の募集、各大学の大学とのマッチング、日本語で会話を続けるコツや教科書を用いた復習の行い方などのワークショップを行って活動に備え、活動中は日本人学生の学びの質を上げるためにFacebook上にされる活動報告にコメントをしている。

この活動では海外での希望者が多いにもかかわらず日本人学生の参加希望者が少ないというニーズの偏りが問題になっていた。そこで、日本人参加者を増やすために過去の参加学生へのインタビュー調査を行い、頻繁なミーティングが時間的負担となり複数年連続して参加する学生がいないことが参加者が増加しない原因のひとつだと推察した。そこで2016年度はミーティングの数を極力減らし、Facebookページ上での意見交換を中心とした。その結果、2017年度には2016年度参加者11人の内2人の学生が連続して参加しており、この方向で継続していけば、参加者を増やしていくことができると考えられる。

対面でのミーティングが減ることで参加学生相互の情報共有ができなくなることが懸念されたが、事後アンケートではFacebookページ上のコメントは他のメンバーに対するものも全て読んで参考にしていたという声が多く、参加者増加のためには、この方法をとることも問題ないと考えられる。

### 5. 縦のつながりを構築する：日本語教員養成活動の中で

本節では、推進室における日本語教員養成活動を中心に、その中でどのような縦のつながりを構築していったかを述べる。この縦のつながりとは、日本語教育に関心を持って推進室を利用する学生から、かつて利用していた卒業生ま

での人のつながりである。

### 5. 1 実践日本語教育科目履修生の授業準備

日本語学科に入学した1年次生が本格的に推進室を利用するようになるのは、実践日本語教育科目の準備のためである場合が多い。研究員は準備に必要な教材・教具などを紹介し教案を書く際の助言も行う。1年次に研究員から多くのサポートを受けた学生は、「教えずに助言する」方法に多く触れることになり、上級生になった後に下級生へのサポートを積極的に引き受けるようになる傾向がある。この下級生に「教えずに助言する」ことは自分の教授法をメタ的に捉えなおす機会にもなる。上級生に下級生のサポートを依頼する際には、指導することがどのように自身の学びになるのかを明確に伝え意識させることが縦のつながりを構築する際に効果的なようである。

また、実践日本語教育科目で取り組んだ教材作成の成果が広い範囲で共有されるよう、2010年から「日本語教材コンテスト」を年に2回行っている。2015年までは応募作品を写真に限っていたが、授業でスライドを多用する近年の傾向にあわせスライド作品も対象とした。その結果、複数枚を組み合わせた作品も応募されるようになり、応募作品の多様化につながった。また、学部生から大学院生までの応募があり、非常勤の日本語教師として働いている大学院生の作品は学部生に大きな刺激になっていた。

### 5. 2 各種日本語レッスン

推進室では4節で述べた多くの日本語レッスンが行われているが、これも縦のつながりの構築に活用した。まず、上級生のレッスンにアシスタントとして下級生を参加させたが、上級生は十分な授業経験がないため、多くの下級生をアシスタントとして活動に巻き込むような授業を展開することは難しい。そこで、研究員が4名程度の学生をアシスタントとし、活動に巻き込む形のプライベートレッスンを実際に何度か実施した。このレッスンに参加した学生は複数の下級生を活動に巻き込む授業が出来るようになり、授業内で互いの距離を縮

めていった。この活動からは縦のつながりの構築だけでなく、教育的成果も得られた。下級生は上級生の授業手法を実際場で学ぶことができ、上級生は授業準備をより入念にするようになるなど、責任感の育成につながった。

### 5. 3 日本語教育能力検定試験対策勉強会

日本語教育能力検定試験とは、日本語教員になる者が身につけておくべき基本的知識について問うもので、公益財団法人日本国際教育支援協会（JESS）が年に1回、10月に実施している試験である。検定試験実施要項によると、目的は、「日本語教員となるために学習している者、日本語教員として教育に携わっている者を対象として、日本語教育の実践につながる体系的な知識が基礎的な水準に達しているかどうか、状況に応じてそれらの知識を関連づけ多様な現場に対応する能力が基礎的な水準に達しているかどうかを検定することを目的とする。」とある。出題範囲は言語一般にとどまらず、社会や心理といった関連領域まで広く及んでいる。そのため、合格率は毎年20%前後と難しい試験である。

推進室では検定試験合格には欠かせない計画的な学習の継続を支援するため、TAによる勉強会を開いている。研究員は希望者の調査・開催日時・勉強会の内容の決定などをTAと相談しつつ行なっている。2016年度まではTAは大学院生を雇用していたのだが、学部生同士のほうが縦のつながりの構築に有効だと判断し、2017年度は検定に合格した学部生をTAとして雇用した。学部生は学部の授業を把握しているため、学習内容がどの履修科目に対応するか、検定試験と履修科目の試験に共通する勉強法なども説明することができる。このことから以前と比べ下級生からも活発に質問が出されるようになり、縦のつながりの構築にもつながっていった。

### 5. 4 日本語海外教壇実習・派遣留学

京都外国語大学には長期（1セメスターから2セメスターの期間）と短期（2週間から3週間）の海外教壇実習制度がある。長期の教壇実習はオランダ

国立南大学、仁川大学校（韓国）で行われている。

長期の実習の場合は、語学留学という面と教壇実習という面を合わせ持っている。長期間にわたって外国に住み、外国語を話し、かつ日本語を教えるという体験を積むと、学生たちは職業的なモチベーションを得るようで、帰国後の学ぶ姿勢に変化が見られたり、日本語教育・日本語学関係で進学をしたり、実際に日本語教師になった経験者も多い。

また、短期教壇実習は、オーストラリア国立大学と中国の広東外語外貿大学で、夏休み・春休みの各4週間の海外セミナーとして始まったものだが、現在では、オーストラリアに加えて（広東外語外貿大学は2006年以降実施せず）、以下の教育機関で教壇実習が行われている。夏休みは、オーストラリア（オーストラリア国立大学）、台湾（東呉大学）、韓国（釜山大学）、マレーシア（ケパラパタス中等高等学校）で行われ、春休みには、アメリカハワイ州（ハワイ大学カピオラニ・コミュニティ・カレッジ）、台湾（東呉大学）、マレーシア（マレーシア国立科学大学）で行われている。2017年度からはマレーシア（国立タイピン高等・中等学校）も加わった。

それぞれ、各教育機関によるが、授業見学をしつつ現地の先生方に模擬授業を見てもらい、その後教壇に立つ形式になっていることが多い。授業計画を立て、教材を作り、実践するという能動的な活動を通して海外留学ができるというのは、語学研修以上の効果を本学学生たちにもたらしている。また、同世代の実習生が日本語の授業をするということで、現地の学習者たちのよい刺激になるという面もあり、双方向での学びの場が広がっている。

推進室では、実習生の事前学習、実習中のサポート、事後学習を担当している。事前学習ではビジネスマナーの指導から、実習先に応じた授業を組み立て、模擬授業までを行う。研究員が着任して1年目は様々な実習先で対応できるよう基本的な技術養成のための指導をしていたが、2年目の2017年度からは各実習先のスタイルに合わせた内容に組み替えた。この変更は2016年度の実習生への詳細な事後インタビューの結果によるものだが、実習生は「後輩が困らないように」とインタビューに非常に協力的で、これも縦のつながりへの意識の育

成を試みてきた成果の一つだといえる。インタビューに答えることで自己の経験をメタ的に捉えることも可能になったようで、事後レポートなどでは出なかった改善のアイデアなどがインタビューでは得られることもあった。

また2017年度からは事前学習最終課題の模擬授業に、実習経験のない下級生を学習者役として招待する試みを始めた。この試みにより実習生は実際のクラスに近い人数での模擬授業をすることができ、下級生は将来海外教壇実習に参加するために何が必要なのかを早い段階で知ることが可能になった。これらも縦のつながりを活かす活動といえる。

実習中、実習生は毎日 JapaS に実習記録を書き込むため、研究員も毎日記録にコメントをつけ、より効果的な振り返りを促しているが、この記録は次年度の実習生が準備する際には貴重なデータとなるものである。事後学習課題は主に下級生への広報活動であり、研究員は学生が実習経験を端的かつ魅力的に下級生に伝えられるよう方向性を指導すると同時に、次の実習参加希望の学生に実習生を紹介している。これらもまた情報伝達という縦のつながりを構築するものである。

## 5. 5 各活動に共通する効果

ここまで推進室における日本語教員養成活動を中心に、その中でどのように縦のつながりを構築されたかを述べてきた。最後に5節のまとめとしてその効果を述べる。

様々な活動で上級生と下級生の交流の機会を作ることで、推進室において相互の情報提供が活発になった。具体的には、研究員から促さずとも、上級生からは日本語教育ボランティアへの勧誘、下級生からはゼミや留学についての質問などが交わされるようになった。このようなときには、研究員は積極的に学生たちに声をかけ、上級生には下級生のサポートへの感謝を、下級生には来年度は先輩としてサポート側にまわって欲しいことを間接的な表現で伝えることを心がけた。このような働きかけを続ける中で、学生達には推進室を中心としたコミュニティへの帰属意識が次第に形成され、コミュニティをよりよくしよ

うという意識が培われていくようである。

## 6. 縦のつながりを結びつける：日本語学科主催イベント 「全日本ジャパンプール大会」

本節では、推進室で日本語教員養成活動を中心に構築してきた「縦のつながり」が推進室の外の活動でどのように強化されたかを示す。推進室の外の活動例として取り上げるのは、日本語学科主催イベント「全日本ジャパンプール大会－日本語学習者のための日本語・日本文化大会－（以下、全日本ジャパンプール大会）」である。

「全日本ジャパンプール大会」とは、ワシントン DC 日米協会主催でアメリカで毎年開催されているクイズ大会で、かつて人気を博した「アメリカ横断ウルトラクイズ」のような早押しのレストラン形式でおこなわれる。選手だけでなく観覧者も楽しむことができることから、現在では、アメリカだけでなく、ヨーロッパやメキシコなど世界各地で毎年開催されるようになっており、2017年には、京都外国語大学日本語学科の主催で国内初の大会が開催された。

この大会の開催にあたって、2016年には「全日本ジャパンプール準備委員会」「全日本ジャパンプール実行委員会」が設置され、1年以上にわたって京都外国語大学日本語学科の学生主体で大会の準備・企画・運営をおこなった。京都外国語大学日本語学科は日本語教員を養成する学科で、所属する学生約300名は全員が日本語教員養成プログラム（主専攻）に登録されているが、この日本語教員の卵たちが「全日本ジャパンプール大会」の企画・準備・運営を担当した。学生スタッフは50名で以下のような班に分かれ、それぞれの担当の教職員との協働を体験した。

【司会班】司会の原稿作成と司会

【会場班】会場案内、会場設営、賞状・賞品の見積もり・発注・贈呈の準備など

ご来賓・審査員のお迎えなど

【参加者エントリー班】選手のエントリー、選手へのサポート

【広報班】ポスター・チラシ・動画の準備、予想問題の発信、SNSによる広報など

【問題班】クイズの問題・ルール作成など

【企画班】懇談交流会、和菓子作り体験など当日の一般観覧客向けミニイベントの企画

学生スタッフたちは、たとえば、学生たちは本学の職員・教員にアポイントメントを取って交渉したり、学外の企業に見積もりを取ったりしなければならないこともあった。その際に社会人として必要なビジネスマナーを踏まえて行動することを学んだ。

そして、上級生と下級生が協働する過程において、縦のつながりを認識して行動できるようになっていった。たとえば、広報班の学生S（日本語学科3年次生）は、2017年4月にアポイントなどのメールの書き方について担当教員から指導を受けていた。その約半年後、この学生Sは、自らの経験をもとに、下級生Y（日本語学科1年次生）にメールでのアポイントの取り方を指導するようになっていた。推進室の日本語教員養成活動で構築してきた「縦のつながり」が推進室外の活動で強化されたと言ってよいだろう。

## 7. 縦のつながりを結びつける：情報の一元化

5節、6節では対人コミュニケーションにおける縦のつながりの形成を示した。この縦のつながりをより長期間で考えたとき、過去の有益な情報が整理されアクセスしやすい状態であることは非常に重要である。

推進室で扱う活動は4節、5節に記したように非常に多く、そこで蓄積されるデータは膨大である。その一方で研究員の任期は短くその情報が十分に整理されないままに次の研究員に引き継がれている。

そこで、2016年度からは、JapaS・Facebook上の記事へのリンクを貼ったまとめ記事の作成、Facebookのノート機能の利用、アクセスの簡便化のためのQRコードの利用などの取り組みを行なっている。これにより一定の効果は生じているが、まだ情報が十分に共有されているとはいえない。学生たちへ



の聞き取り調査では、情報が存在すること自体に気がつかないままにいる学生が非常に多い。これは研究員が日本語学科の学部生の授業を担当しておらず、推進室に来室することのない学生とのパイプを作りづらい点も大きな要因であると考えられる。

## 8. おわりに

本稿では、推進室が大学内外の様々なニーズを、横の広がりや縦のつながりという観点から捉え、それをいかに結びつけ、互いのリソースへと変化させてきたかを述べた。そのすべてに共通するのは、情報が伝わるネットワークを築く必要性と、必要な情報同士が結びついた際に、それを活動という形にする学生の意識の育成の重要性である。

推進室で行なわれる様々な活動は学生のコミュニティに貢献しようという意識と責任感がなくては成り立たない。各学生の能力と意識に応じ、かつ本人の成長のための適度な負荷がかかるような活動は、学生一人ひとり異なるものである。そのため研究員は日々の会話の中で学生の性格や経験、ニーズを細かに把握していることが望ましい。また、多忙な学生達がボランティアに取り組もうと思うには、それが貴重な学びの機会であると紹介する研究員に対しての信頼が不可欠である。この情報の集積と信頼の獲得には膨大な時間と労力が必要となるが、推進室の研究員は有期契約であり数年ごとに引継ぎが行われる。このため研究員が個々の学生と築いた信頼と細かな情報は数年ごとに無に帰しており、推進室が大学全体・地域社会にとって更に強力なリソースとなることを阻む一因となっていると考えられ、実に惜しむべきことであると思われる。

### 注

- 1) JapaS は2009年に Java により構築された日本語教育や日本語教員養成に特化した SNS である。

### 参考文献

- 大谷つかさ・中俣尚己・中西久実子 (2013) 「ラーニング・コモンズとしての日本語教員養成推進室が活性化した要因－2008～2011年の実践報告－」『無差』20,

- pp.29-44, 京都外国語大学日本語学科.
- 北川幸子・中西久実子 (2016) 「ヒト・モノを結びつけることで生み出される新たな教育リソース」『無差』23, pp.17-35, 京都外国語大学日本語学科.
- 中西久実子 (2008) 「日本語教育実習生のダイアリにおけるインプットとアウトプットの再構築」『無差』15, pp.33-45, 京都外国語大学日本語学科.
- (2011) 「Web ダイアリにおける「日本語教育実習評価シート」の縦断的分析ー「チュートリアル」での日本語教育実習の必要性ー」『無差』19, pp.31-53, 京都外国語大学日本語学科.
- ・村上正行・上田早苗 (2011) 「SNS を活用した日本語教育実習生と日本語学習者の協働学習ーSNS 上での交流を活発にする要因とはー」「ネットワークコミュニティにおける学習・教育支援」特集教育システム情報学会論文特集・解説特集, 28巻1号, pp.61-70, 教育システム情報学会誌.
- 中俣尚己・岸磨貴子・中西久実子・村上正行 (2010) 「日本語教師のプロフィেশナーを養成するための Skype を利用した遠隔会話演習」日本教育工学会 第26回全国大会 (於：金城学院大学)
- ・漆田彩・小野真依子・北見友香・竹原英里 (2010) 「Skype を活用した日中会話交流プログラム」『実践國文學』83, pp.25-48, 実践女子大学.
- ・岩崎瑠莉恵・萩原友世・中野仁美・山上聡美 (2012) 「Skype を活用した初級日本語教育プログラム」『実践國文學』82, pp.26-39, 実践女子大学.
- 山本由紀子 (2006) 「日本語教師教育研究資料としてのダイアリについてーダイアリの性質とその読み方についての一考察」, 土岐哲先生還暦記念論文集編集委員会 (編) 『日本語の教育から研究へ』 pp.71-82, くろしお出版.
- 由井紀久子・中西久実子・中俣尚己 (2010) 「実習生の日本語教育能力を高めるためのダイアリ活動ー紙媒体から SNS へー」『ヨーロッパ日本語教育』14, pp.100-107, ドイツ日本語教師会.